シーズレクのサガ　八四章～一三六章

ヴェーレントの物語　（その一）

石川光庸

（一）　ほとんどすべてのゲルマン部族の間で広く知られていたらしい名人鍛冶ヴィーラント（独 Wieland、古ノルド語 Völundr、Velent、古英語 Welond）の伝説は、七～八世紀頃の考古学的資料をはじめとして十九世紀北ドイツの口碑に至るまで、さまざまの形で伝えられている。しかしその大多数は断片的であり、又は単に名匠としての言及にとどまり、ヴィーラントその人を中心とする伝説を語ってくれるのは、『エッダ』中の「ヴェルンドの歌」Völundarqviða と、十三世紀ノルウェーの『シーズレクのサガ』Þiðreks saga という二つの北欧古文献をおいてはない。

ヴィーラントは中世全体を通じて、まず第一にギリシャ神話のヘーパイストスやダイダロスに匹敵する名人鍛冶として、第二に、彼を捕われの身とした敵王の家族に残酷な復讐をとげたあげく人工翼をつけて敵地を脱出する一種のスーパーマンとして知られていた（後の点でもラビリントから脱出するダイダロスにそっくりであることは言うまでもない）。その復讐譚のみを主な内容としているのが「ヴェルンドの歌」の全四十一詩節であり、こ

れに対し、少年ヴィーラントの生い立ちから修業時代、宮廷での名匠としての活躍ぶり、そして一転して王の寵を失なって迫害され、ついに復讐にいたるまで広範囲に筋を追って物語っているのが『シーズレクのサガ』の八四章〜一三六章である。ヴィーラント伝説を知ろうとする場合に、この『サガ』の持つ意味はきわめて大きい。同じ復讐を扱った部分のみを比べてみても「ヴュルンドの歌」は極端に簡素であり、『サガ』からの知識なしでは理解できぬ箇所さえある。（たとえば「ヴェルンドの歌」では復讐をとげたヴェルンドは、第三九詩節で唐突に空中に飛び上っており、人工の翼については一言も触れられていない。）

さらに、後述のように『シーズレクのサガ』は実は北ドイツ一帯で語られていた物語の翻案であり、もともとヴェストファーレン地方の鉱山地域で発達した（発生したかどうかはまた別の問題であるが）痕跡があるヴィーラント伝説の研究には、理想的な資料とさえ言えるだろう。もちろん十三世紀後半に書かれたこの『サガ』には、当時愛好されたロマンス的な要素が多く盛り込まれ、本来のヴィーラント伝説とは無縁な色づけがなされている可能性が大きい。それらは他の資料との比較検討のうえ注意ぶかく選別されるべきであるが、これは後の課題である。まず原資料を忠実に読み、その特徴を取りあげる作業がなされなければならない。その際、同じテーマの部分では当然「ヴェルンドの歌」を常に視野の一角に置いておかなければならないだろう。

以下にこのような目的から試みられた翻訳と注釈とを掲げるが、本稿では八四章から一一一章まで、いわばこの名人鍛冶の「修業時代」と「遍歴時代」にあたる部分のみを取上げる。一一二章以降の本格的な復讐譚は次稿で検討したい。

（二）『シーズレクのサガ』は十三世紀半ばにノルウェーの、おそらくベルゲンで書かれた（あるいは翻訳編集

された）ゲルマン英雄物語集成とも言うべきサガである。全巻を貫いているのは東ゴートのなかば伝説的な英雄 Theodericus（Dietrich von Bern）および彼を取りまく勇士たちの事蹟である。その勇士たちのひとりが Vidigoia（Witege-Viðga）であり、彼にはきわめて古くからヴィーラントの息子という伝承があったため（八世紀の古英語詩 Waldere に Welandes bearn「ウェーランドの子供」とあるのが最古の記録）、かなり自然にヴィーラント伝説もこのサガに取り入れられたのであろう。

紙写本のプロローグには、この物語が「ドイツ語で書かれた最大のもののひとつ」であり、「ドイツの男たちの物語と歌謡とから編んだ」と明記してあり、物語の舞台や登場人物の名称からもドイツ由来はまちがいない。（Velent ヴェーレント という名前そのものも Wieland の低独語形である。）ちょうど国王 Hákon Hákonarson（在位一二一七～六三）のもとにノルウェーが北ドイツ諸都市と盛んに通商した時期で、フランス語やラテン語の南欧騎士道文学がたくさん翻訳・翻案された時期でもあった。

成立については、ハンザ商人が冬期滞在中のベルゲンで夜長しのぎにノルウェー人に語ったものだとか、北ドイツに滞在したノルウェー人が滞独中に、あるいは帰国後にまとめたものだとか、諸説があるが、定説はない。

ここに登場する英雄たちは中高ドイツ語の叙事詩にも描かれていることが多いが、その伝承はかなり異なっており、現在は失われたが、かつては低地ドイツ語圏に広まっていた伝承を知る貴重な資料になっている。

ただしすべてのロマンスと共通して、このサガにおいても空想的・メルヒェン的素材と、歴史的素材とが混在している。名人鍛冶ヴェーレントの物語の部分も同様で、前半部には小人や巨人が登場するが、後半部はかなり写実的な復讐譚となっている。

このサガは数種の写本に伝えられているが、写本相互の関係は複雑で、それぞれの価値や関係について研究者の見解にはかなりの相違がある。十三世紀末にベルゲンで作られたと推定される羊皮紙写本（Mb本、現在ストックホルム王立図書館蔵）が一般には最古・最善と見なされているが、一七〇〇年頃アイスランドで作成された二種の写本（AとB）の方が、より古い構成を示しているという意見もある。また近年は、これまで価値が少ないと見られていた一五〇〇年頃のスウェーデン語訳を重視する主張もある（現状では構成に乱れがあるMb本がより完全なものであった頃、Mb本から訳したものであるという説、又は、そもそもこれはMb本からの翻訳ではなく、低地ドイツ語原典からの翻訳だとする説など）。

言語はMb本は古ノルウェー語であり、A・B本は古アイスランド語である。Mb本は五人の写字生の手になるが、第四・第五写字生はアイスランド人らしく、アイスランドの語形が混入している。

文体は素朴、簡潔、あるいは無造作と言ってもよいくらい飾り気がない。古北欧のサガ文体は中世のハードボイルドとも呼ばれるほど骨格のみに凝縮されたものであるのが普通だが、『シーズレクのサガ』もその一典型である。ただし、「アイスランド人のサガ」と言われているジャンルに比べれば、まだしも描写はより詳しく、温かみがあると言える。

（三）以下の試訳および注釈の底本には、Mb写本とA・B本を対校した Henrik Bertelsen, Þiðriks Saga af Bern, SUGNL 34, København 1905-11 を使用した。翻訳に当っては Fr. H. v. d. Hagen, Dietrich von Bern, Breslau 1855 ; F. Erichsen, Thidrek von Bern, Thule 22, Düsseldorf 1967 の二種の独訳を参照した。翻訳は、まるで芝居の台本のような骨格のみの乾いたスタイルをできるだけ移すことができるように、日本語としては不

自然になることも敢て避けずに、いわゆる「直訳調」を試みた。たとえば歴史的現在と過去時制の（ほとんど恣意的と思えるほどの）混在ぶりも、できるかぎりそのまま訳してみた。

なお、参考書目は続稿にまとめて掲げる。

《ヴェーレントの父、巨人ヴァージの話[1]》

84　巨人ヴァージはショランドに住んでいる[2]。彼は前に話したようにヴィルキヌス王が人魚との間にもうけた息子で、父親が[3]与えた農場にいるのだ。彼が武人であったとは伝えられていない。父親が初めにくれたもので彼は満足なのだった。ヴァージには息子があり、名をヴェーレントという。息子が冬を九回むかえたとき、[4]ヴァージは彼になにか手技を身につけさせたく思う。フーンの国に[5]ミーミル[6]という名の鍛冶師が住んでいて、その技は万人に優るという話をヴァージは聞いたことがあった。そこで彼は早速息子のヴェーレントを連れて旅立ち、鉄を鍛える術を仕込んでくれるよう頼んでミーミルの手に息子をゆだねた。そして巨人ヴァージはショランドの農場にもどる。

その頃ミーミルのところにはスィグルズ[7]も弟子となっていた。彼は相弟子にさんざん悪戯ばかりして、打ったりたたいたりもするのだった。

巨人ヴァージは、自分の息子がスィグルズのためにひどい目に会わされているのを知り、出かけて行ってショランドに連れもどす。ヴェーレントはフーンの国で三回冬を過ごし、今や十二才になっている。彼は故郷に十二か月とどまり、そして誰からも好かれる。彼の技量は誰にもひけをとるものではない。

さてショランドで巨人ヴァージは、カラヴァ[8]という名の岩屋に小人が[9]二人住んでいて、その鉄を鍛える腕前は他の小人も人間もとても比較にならない、という話を耳にする。どんな種類の鉄からでも刀剣や甲冑を鍛え上げ、金銀細工も自由自在、そもそも鍛造できる物ならどんな材料からであれ、なんでも望みの物を作ることができるのだという。

訳注

(1) Vaði は中高独語文学で Wate という名でよく登場する（たとえば Kudrun, Alexanderlied, Rabenschlachtslied）が、

ヴィーラントの父として語られることはない。85章にあるように海峡さえも「渡渉して」（ノルド語 vaða、独 waten）しまうほどの巨人というところから出た名前か？　ヴィーラント伝説とは本来無関係な古い起源のバルト海のデーモンかという説がある（H. Schneider, Germ. Heldensage, II, 2, S. 368）。ヴィルキヌス王と人魚の間の子で人間の世界を好まなかったこの心優しい巨人は、父親の遺産の農場の主として小市民的平和を好む。息子の Velent をも彼は鍛冶屋として一人前にさせようと望むのであり、85章で背中に息子をおぶって海峡を渡るシーンは、他のサガにはほとんど類を見ない日常的な温かい親子の像である。

(2) Sioland　デンマーク最大の島 Sjælland のこと。

(3) 写本 Mb^1 36章にヴァージが生まれるいきさつが述べられているが、途中で一葉脱落しているため、ほぼ同内容の写本 Mb^3 の324章からあら筋を述べてみると――　エルベ川以東のスラブと北ゲルマン（今日のデンマーク、スウェーデン）を含む大国の王ヴィルキヌス（Villcinus）が、ある日バルト海東岸の森で美女に出会う。人魚であるこの女と交わった王が帰国の舟に乗っていると、人魚が海中から現われ舟を引きとめる。王が人魚に城を訪ねてくるように言うと、人魚は姿を消し、舟は再び帆走できる。半年後にある女が城に現われ、王の子を宿していると言う。あの人魚である。宿を与えられた人魚はやがて子を生む。その子はヴァージと名付けられるが、母親は姿を消してしまう。ヴァージは巨人のように成長するが、性格は母親の血筋を引いて人間のようでなく、人づき合いもうまく行かない。王もこの子をあまり愛さないが、しかし自分が死ぬ前にショランドの十二の農場を彼に与える――

(4) 古代のゲルマン人は冬の数で年数を表わした。Ulfilas のゴート語聖書においてすでにそうであり、現代アイスランド語にまで至っている。

(5) Húnaland　「シーズレクのサガ」では、ライン川とヴェーザー川にはさまれた北ドイツ一帯を含む王国のこと。ほぼ現在のヴェストファーレン州とニーダーザクセン州にあたる。フリースランド（！）の王子アッティラ（Attila）が領有したことになっており、彼の居館は Susat（今日のゾースト Soest）にあったとされる。ゾーストの近辺は古来鍛冶業、鉱山業が盛んであり、ヴェーレントがこの地方で鍛冶修業をしたという記述は、十二～三世紀の実情に合っている。それどころか十二世紀イギリスの Geoffrey of Monmouth が書いた『Vita Merlini には、「Pocula, quae sculpsit Guilandus in urbe Sigeni「ヴィーラントがズィーゲンで作りあげた杯」という一節すらあって、今日なお鉱業の中心地

である Siegen がヴィーラントと結びつけられているのである。

(6) Mímir　ゲルマン神話中の有名な妖精。Edda では知恵の泉の精で、オージン Óðinn に頼まれて、オージンの片目を代償に泉の水を飲ませる（Völuspá）。中高独語の叙事詩 Biterolf und Dietleib や『シーズレクのサガ』では小人の名人鍛冶で、後出のヴェーレントの名剣 Mimung も本来はこの名人鍛冶の考案した製法によるのかもしれない。

(7) Sigurðr　『ニーベルンゲンの歌』や Edda などで活躍するゲルマンの最も有名な英雄のひとり。mhd. Sîfrit, Seyfrid ; nhd. Siegfried. Edda や『ヴォルスングのサガ』では、スィグルズは名人鍛冶レギン Reginn に養われ、亡父 Sigmundr の剣の破片から名剣を鍛えてもらうことになっている。十二世紀ノルウェーの Hylestad の木造教会の正面飾りには、この場面が見事に彫刻されている。しかしこのスィグルズが鍛冶屋ミーミルの養子として従弟たちに乱暴で、兄弟弟子のヴェーレントをもさんざん打ったりたたいたりしていじめたというのは、このサガの作者の一種のユーモアの現われであろう。一番弟子エッキハルズに対する彼の乱暴ぶりは後の二七〇章に詳しく語られている。

(8) Kallava　紙写本AとBには Ballofa となっている。85章以下の記述、特に91章で、この地から三日の旅でヴィサラ河（ヴェーザー川）に出、さらにこの川を丸木舟で下ってユトランドに漂着したという記述を見れば、やはり Húnaland のどこかと推定される。北西ドイツのヴェストファーレン州の古邑ゾーストから南西約30キロのところに Balve an der Hönne という町があり、そこには今も多くの考古学的遺物を発見できる大きな洞穴がある。Hönne 川は以前は Hunne と書かれ、Húnaland と無関係ではないだろう。前注(5)にも記述したように、ヴェストファーレンのあたりは古来鉱山と鍛冶業で栄えた土地である。Kallava の岩屋にはこの Balve の洞穴の記憶がひそんでいると考えていいだろう。近年の考古学の成果もこれを裏づける方向にある（W. Winkelmann, Beiträge zur Frühgeschichte Westfalens, Münster 1984）。

(9) ゲルマン族でもケルト族でも、鍛冶屋は小人と考えられていることが多い。変哲もない岩石から貴重でもあり危険でもある金属を探り出す鍛冶を異界の妖精と見なすことは自然である。この他に、元来は小アジアから起ったと思われる鍛冶技術を北欧にもたらした異民族に対するイメージが、小人として固まったとも考えられよう。

《巨人ヴァージが息子ヴェーレントを鍛冶屋修行に出す話》

85　さて巨人ヴァージは、息子ヴェーレントを連れてグレーナ海峡[10]まで来る。そこには海峡を渡るべき舟がなく、しばらくそこで待ってみた。それから今や彼は少年を自分の肩に乗せ、海峡を歩いて渡ってしまう。[11]海峡は九エレ[12]もの深さだったのだが。その後の、父子が岩屋に着くまでの旅については格別の話もない。巨人ヴァージは例のふたりの小人に会って交渉を始めた。自分はここに息子のヴェーレントを連れてきているのだが、十二か月の間徒弟修業をさせ、鍛冶のあらゆる技を教えてやって欲しい、そのかわりそちらが満足するだけの黄金を自分は支払うつもりである、と。すると小人たちが言うには、もし黄金一マルク[13]払うつもりがあるなら、少年を預かってどんな技をも伝授しよう、と。巨人はそれに同意し、即座に黄金を小人たちに手渡す。それから彼らは、父が少年をむかえに来るべき時を十二か月の期限後のある日に定める。こうして今やこの取り引きは完全なものとなった。

訳注

(10) Grœnasund　デンマーク南部、Möen 島と Falster 島の間の海峡 Grönsund のことと思われる。

(11) 「渡渉する」は古ノルド語で vaða であり、そもそも巨人ヴァージ Vaði という名は、ここに由来するとも考えられる。前注(1)参照。巨人ヴァージが、頭韻を踏んで肉親の関係を示すヴェーレントという名の子供を背負って海峡を渡渉する姿は、やはり巨人である聖クリストフォルス Christophorus が幼児キリスト Christus を背負って渡渉する姿を想起させる。一見奇矯の説のように思えるが、だいたいヴィーラントの原像にはキリストのおもかげが見えかくれするので、あ

ながち見当はずれとは言いきれない。（大英博物館所蔵の「フランクスの小箱」やリーズ博物館の石造十字架に描かれたヴィーラント伝説は、キリストとの結びつきを示す。）詳しくは稿を改めて述べたい。

(12) alin　エレはひじから中指の先までの長さ。

(13) mork　一マルクは八オンス＝半ポンド＝二五〇グラム。

《巨人ヴァージが息子をむかえに来ること》

86　かくして巨人ヴァージはショランドにもどるが、ヴェーレントはこの地にとどまり、鍛冶を習う。彼はまことに呑み込みが早く、師匠がやってみせることはすべて自分も作れるようになる。また実にまめまめしく師の小人に仕えるので、少年の父親が取り決めどおりの期日に息子を引き取りに来ると、小人たちは少年を手放したくなくなってしまう。そこで彼らは巨人ヴァージに、少年をもう十二か月ここに置くようにと頼む。ヴェーレントにここを出ていかれるよりは、前にもらった黄金一マルクを返す方がまだましであり、これからの期間には少年がこれまで習ったことの倍も教えてやるつもりだ、と彼らは言う。巨人ヴァージはこの申し出を受け入れる。だが少したつと小人たちは、ヴェーレントの奉公がこんなに高くつくのを後悔する。そこで彼らは巨人ヴァージと談判してこう言う。もし彼が決められた日に息子を引き取りに来なければ、自分らは当然のこととしてヴェーレントの首を打ち落とすつもりである、と。この申し出を巨人ヴァージは受け入れ、帰国しようとする。

《巨人ヴァージと息子ヴェーレントの最後の会話》

87　さて巨人ヴァージは息子のヴェーレントを呼び寄せ、岩屋から出て自分についてくるようにと言う。息子はそうする。それからふたりはさまざまの話をした。巨人ヴァージは一振りの剣をもっていた。彼はそれをつかむとある茂みの奥深くに差しこんだので、剣はすっかり姿を消してしまった。そして彼がヴェーレントに言うには、「先刻とりきめた期日になにか故障が生じてわしが現われず、あの小人どもがお前の命をとろうとしたら、この剣をふるって雄々しくたたかうのだぞ。ふたりの小人にみすみす殺されるよりは、そのほうが良い。親戚知己の連中に、ヴァージが育てあげた子供はたしかに娘などではなくて、ちゃんとした男子だと言ってもらいたいものだからな。もっとも、約束の日にわしが遅れることはまずあり得ぬ話だが。」

≪巨人ヴァージがショランドに帰ること≫

88　かくして親子は袂を分かち、ヴァージは帰国し、ヴェーレントは岩屋の小人のところにもどる。そして今までの倍もの熱心さで仕事に精を出し、小人たちが持っているあらゆる技術をすっかり学び取るまで倦むことがない。だが他方では小人たちにも実にまめまめしく仕えるので、彼らの機嫌も悪くはないのだ。しかし同時に小人らには、彼の長足の進歩がいまいましくもある。奴の命はこちらの手中にあるのだから、奴が名人芸を発揮できるのもそう長いことではないのだぞ、と小人たちは腹黒くも考える。

そして十二か月が過ぎる。巨人ヴァージは道の遠さを考慮して、むしろ早目に息子の許に発とうと思う。約束の日に遅れてはならないからだ。国を発った彼は夜に日をついで道をいそいだので、約束の日の三日も前に着いてしまった。しかし例の岩屋はぴったりと閉ざされてあって、入ることはできない。そこで彼は山すそのあるところに横になり、岩屋が開くまで寝て待とうとする。だがここまでのおそろしく長い道のりのため、彼はすっかり疲れていた。すぐに彼は眠りこみ、ぐっすりと、そして長く眠る。彼はまことに頑健なので、到着したままの姿で長々と寝ており、彼のいびきは遠くまで響きわたった。するとまもなく雨が降り出し、そのすさまじさは前代未聞である。

≪巨人ヴァージが死ぬこと≫

89　するとこの時、大きな地震が起こる。山の上部が崩れて、大水と樹木と岩石と多量の土砂を巻き込んで大きな地すべりとなり、巨人ヴァージの身体を呑みこんでしまう。こうしてヴァージは命を失う。

約束の日となった。小人たちは岩屋を開き、巨人ヴァージが息子のヴェーレントを引き取りにやって来ているかどうかを見ようとする。ヴェーレントも外に出て父親を探すが、父の姿はどこにもない。とある斜面に来てみると、そこで山崩れがあったばかりのようである。父親はこの山崩れの下敷になってしまったのではないか、という思いが心に浮かぶ。しかしここは仇討ちをするには条件が悪すぎることを彼は見てとる。それから前回ふたりが別れる前に父が彼に与えた助言を思い出し、巨人ヴァージが剣を隠した藪がどこだったか思案する。しかしこの藪もすっかり押し流されているのだった。今やまことに危険な状況になっていることをヴェーレントは痛感する。父親が死んだ上に、自分の死も確実らしいのだから。

《ヴェーレントが小人を殺す話》

90　あたりを見まわしていると、土砂の中からあの剣の柄が出ているのが見える。そこに行って剣を引き抜き、じっと眺めて、こう言った。「さあ、これでもうこれ以上悪いことが起きるのをびくびく待っている必要はないぞ。」小人たちは岩の上に立って一帯を見わたしている。ヴェーレントもその岩に登って行くが、マントの下に抜身の剣を下げているのだ。剣は外からは見えない。まず近くに立っている小人のところに寄って行って必殺の一撃を与え、すぐもうひとりの小人をも斬り殺す。それから岩屋に入って小人たちの鍛冶道具の一切合財と、持てるかぎりの金銀とを奪う。そして一頭の馬に小人たちのものであった黄金と財宝を積む。その上にまだ自分の力で持てるだけの包みを作り、さて北に道を取ってダンメルク[14]に向かう。

訳注

(14) Danmǫrk　デンマークのこと。『シーズレクのサガ』中のヴェーレント物語では、デンマークという総称はここにしか現われない。

《ヴェーレントが北の故郷ショランドに帰ろうとする話》

91　三日の間大急ぎに急いで旅をしたところ、ヴィサラ[15]という名の大河に突きあたった。彼はこの河を渡れない。だが河のそばに大きな森があった。彼はしばらくそこにとどまる。だがそこから海までもうわずかの距離だった。ヴェーレントは仕度を整える。彼は岸辺に行き、一本の大木を見つけてそれを切り倒す。幹を適当な大きさにととのえると、その中をくりぬく。それから樹冠に向かって細くなっている部分に鍛冶道具と財宝とを入れ、木が太くなっている部分には食料と飲物を置く。[16]それから自らその中に入りこむと、中からしっかり固く閉じて、いかなる危害も彼の身には達しないようにする。幹にある穴にはガラスをはめる。そのガラスは好きな時に取りはずしができるようになっていた。だがガラスがはまっている時には、まるでその木が完全な形で生えていた時のように、水はちっとも入ってこなかった。

さて今やこの幹は河岸に横たわっており、その中には財宝と鍛冶道具一切をもったヴェーレントが入っている。ヴェーレントがその丸木の中で身を動かすと、丸木は河の中に転げ落ちる。この丸木はそれから海へ、外洋へと流れ出て十八日間漂い、ついに[17]陸地に着く。

訳注

(15) Visara　ヴェーザー川（Weser）のこと。河口近くに商都ブレーメンがあり、ノルウェーやバルト海諸都市と北ドイツとの商取引きの最も重要な動脈であった。

(16) 羊皮紙本Mbでは fyrir gluggana er a varo treno とあって、樹木の節穴と解せる。しかし紙写本AとBとでは fyrer glugga er aa voru skorner とあって、「幹にあけた穴に」となり、あかり窓、のぞき窓としてわざと作った穴であることがわかるようになっている。

(17) 「丸木船形潜水艦」とでもいうべき代物である。このサガの作者はこの新タイプの乗物を好んだらしく、後の章においても、生まれたばかりのスィグルズ（ジークフリート）が蜜酒用のガラス容器に閉じこめられたまま川を下り、海に流れ出て、やがて岸に着き、牡鹿に育てられることが語られる（二六六章以下）。ヴェーレントの場合もスィグルズの場合もガラスが言及されているが、これはおそらく、アレクサンドロス大王がガラスの樽に入って海に潜ったという古い伝承の影響であろう。ガラスは南欧から輸入される貴重品であるため、神秘的な物質と見られたのであろう。

《ユトランドのニズング王の話》[18]

92　ニズングという名前の王がいて、ユトランドのショージという土地[19]を治めている。ある日のこと、彼の家来どもが王の食卓に新鮮な魚をそなえようとして、網をもって船をこぎ出す。まず網を投げ、それを陸に引き上げる。だが網は急にとても重くなり、動かすこともできないほどである。見ると途方もない大木が網にかかっていたのだった。陸に引き上げ、この木の幹がいったい何であるのか、彼らはいろいろ頭をひねる。その幹の斧あとは実に見事であるので、重さといい、細工の立派さといい、あるいは財宝を入れる長持かもしれないと彼らは考える。そこで彼らは王のところに使いを出し、この幹を検分に来てくれるよう願う。王はやってきてその幹を見た。それから中には何があるのか調べよと命令する。そこで家来たちはその幹を斧で割りはじめる。これに気づいたヴェーレントは、止めろ、中に人がいるのだ、と叫ぶ。この声を聞いた人びとは、この幹の中にいるのは悪魔にちがいないと思い、仰天しててんでんばらばらに逃げ去る。

訳注

(18) Niðungr　『エッダ』の「ヴェルンドの歌」では Niðuðr。「戦意ある者」「怒れる者」というほどの意味。

(19) Þiðð(i)　デンマークのユトランド半島西北端の町 Thisted。後の章でニズング王がユトランド全土を対象とする民会を開いていることを見ると、ショージは王の居館の所在地であるらしい。『エッダ』の「ヴェルンドの歌」ではニーズズ Náðr 王の領国はスウェーデン Svíþiðð ということになっているが、どちらの地名にも Þiðð「民衆」という単語が共通要素となっていることは注目すべきであろう。

《ヴェーレントが幹を開けて外へ出ること》

93　するとヴェーレントは内からこの幹を開け、外に出て王様のところに歩いて行ってこう言った。「殿様、私は人間です。妖怪ではありません。私の命と財産とを保護してくださいますよう心からお願いします。」王様は彼が、たとえ奇妙な方法でこの地に来たにしろ、なかなか美々しい男であって悪魔ではないことを見てとる。そこで王は命についても財産についても保証すると言う。その後ヴェーレントは鍛冶道具と財宝のすべてをひそかに土に埋めて隠す。あの木の幹もだ。そしてこれを、王の騎士のひとりでレギン[20]という名の男が目撃する。　ヴェーレントはニズング王のもとにとどまり、優雅な作法を身につけた[21]小姓として好遇される。彼の任務は、王が食事をする時に王の前に並ぶべき三本のナイフを管理することである。こうしてその土地に十二か月住んだある日のこと、ヴェーレントは海に行って王のナイフを洗い、また研ごうとする。

訳注

(20) Reginn　スィグルズ伝説に登場する賢いが腹黒い名匠鍛冶レギンとは別人。

(21) kurteiss　数少ない南欧起源の語（仏語 courtois）で、『シーズレクのサガ』、成立期のノルウェー王朝の南欧文化傾倒がかいま見える言葉である。

《ヴェーレントが王のナイフを失う話》

94　彼の手から、王のナイフの中で一番良いものが海に落ちる。そこはとても深くて、取りもどす望みはない。ヴェーレントは家に引き返し、お気に入りのナイフがなくなって王は立腹するにちがいない、と考える。そしてひとりごとを言う。「ひどく落ちぶれてしまったものだな、この俺も。いくらもとの家柄がいいと言っても何の役にも立たん。せっかく結構な王様のところに仕えるようになったのに。王様は俺にわざと軽い仕事をやらせて俺を試そうとしたのだ。もし俺が軽い仕事もていねいにやるのがわかれば、もし任されれば重い仕事だって同じように注意してやってのけるだろう、そう期待しておられるのだ。そうしたら

身分もきっと引き上げられるにちがいないのに、ところがこの俺ときたら、その軽い仕事をちゃんとやるのもしくじったのだ。みんなが俺を阿呆よばわりするだろう。」

《ヴェーレントが王のためにナイフを作ること》

95　ニズング王のところにはおかかえの鍛冶がいた。名をアミリアス[22]といい、王のために鉄製品ならなんでもこしらえるのだ。ヴェーレントはアミリアスの鍛冶場に行く。しかし彼はちょうど食事に行っていて、そこにはいなかった。従弟連中もいっしょである。そこでヴェーレントはその場で仕事をはじめ、一本のナイフを作る。その後で三稜形の釘を一本打ち上げ、かなしきの上に置いておく。だがこんなに見事に鍛えられた品を見た人は、前にも後にもありはしなかった。そしてアミリアスがもどって来る前に、ヴェーレントはすべての仕事を終えてしまった。

ヴェーレントは王のところにもどり、いつものように王の食卓に侍って給仕をする。何もなかったかのように。王は前にあったナイフをとってパンを切った。パンは真二つに切れ、さらにナイフは食卓を大きく切り割った。どうしてこの刃物がこんなに切れるようになったのか、王はいぶかしく思った。そしてだれがこのナイフを作ったのか、とヴェーレントに尋ねた。ヴェーレントは答えた。「殿様おかかえの鍛冶師、殿様のすべてのナイフと、その他なんでも殿様がお命じになるものを鍛えるアミリアスでなくて、いったいだれが作りましょうぞ。」アミリアスもこの会話を聞きつけてこう言った。「殿様、私がこのナイフを作ったのでございます。殿がご所望の品をなんでも作って差しあげる鍛冶師は、私をおいてはございません。」王は答えた。「このように見事な刃物を、わしはお前の手が作り出すのは見たことがないぞ。だれがこのナイフを作ったにせよ、決してお前ではないわい。」

訳注

(22)　Amilias　南欧語風の語尾をもち、ローマ人の苗字 Aemilius ともとれるが、前半の要素 Amil- は、むしろ東ゴートの王族 Amelung との関係、特にこのサガの主人公シーズレク大王（ベルンのディートリヒ Dietrich von Bern）との縁戚関係を示すものと思われる。東ゴート族そのものが歴史家 Jordanes によって Amalae と呼ばれている。

《ヴェーレントがナイフをこしらえたのかとニズング王が尋ねること》

96　それから王はヴェーレントを見て、お前がこのナイフを作ったのではないか、と言った。彼は答えた。「殿様、アミリアス

が申すように、彼がこしらえたのでございましょう。」だが王は言った。「もしお前が本当のことを言わぬとなれば、お前はわしの不興を買うことになるのだぞ。」するとヴェーレントは言った。「もしできるならば、殿様のご不興はこうむりたくないものでございます。」そして彼は王に、自分がどのようにナイフを失い、どのように代わりのナイフをこしらえたかを語る。王は言った。「アミリアスなどがこんな見事な刃物を作れるはずがないと、わしにはわかっておったのだ。このようなナイフは見たことがないぞよ。」アミリアスは黙っていられなかった。「殿様のお言葉のように、すばらしいこのナイフはヴェーレントが作ったのかもしれません。だがそれはそれとして、私だとてこれに劣らぬ品を作るかもしれぬではありませんか。彼に私が遅れをとるなどとは、我慢のならぬことでございます。私がヴェーレントより技が劣るなどと世間が言い出さないうちに、私どもの技を試してみとうございます。」

《ヴェーレントと鍛冶師アミリアスの賭の話》

97　ヴェーレントはこう答えた。「私の技はわずかですが、それでも力の及ぶかぎりは精を出して技競べにのぞむつもりです。ひとつ作ってみて下さい。私も別なのを作ります。それでどちらの方が出来がいいか、わかるはずです。」アミリアスは言った。「よし、賭けることにしよう。」ヴェーレントは答えた。「私はあまり金持ちではありませんが、もしお望みなら賭けましょう。」するとアミリアスはこう答えた。「金がないというなら、首を賭けたらよかろう。私も自分の首を賭けるぞ。腕の優った方が相手の首を打ち落とすのだ。」ヴェーレントは言った。「お望みだけ賭けなさるがいい。そして力のかぎりの名品を作られるがいい。ところで、何をお作りになり、また、どのようにそれを試しましょうぞ？」アミリアスは答えた。「貴公は全身全霊の力をこめて剣を一振り打つことだ。私は甲冑一領を鍛えよう。貴公の剣がその甲冑に切り込んで私をいささかでも傷つけるなら、その時は私の首を取るがいい。だが剣が甲冑に喰い込まなかったら、貴公の命は私が確実にいただくこと、疑わぬがよろしかろう。」するとヴェーレントは言った。「喜んでそういたしましょう。貴公も言葉違えをなされず、しかと約束なされませ。」アミリアスは言った。「私の言葉が無効にならぬよう、保証人を立てるとしよう。」王の家臣のうちで最も勇名をもって鳴る二人の騎士が、アミリアスの腕前をよく知っていたので、保証人に立った。

《王が自らヴェーレントの保証人となること》

98　アミリアスはヴェーレントに、そちらの保証人はどこだと聞いた。ヴェーレントは答えた。「だれが私の保証人になってく

れるのか、私にはわかりません。私の腕前をだれも知りませんし、この国では私はだれにも知られておりませんので。」この時王はこうつぶやいた。「こ奴がこしらえたものは、なんでもよく出来ていたな。」そして王は、あの大きな木の幹が漂着したこと、そしてそれが実に見事にこしらえてあったことを思い出す。王は言う。だれもヴェーレントの保証人に立たぬとあれば、王自らが引き受けようと。こうして彼らは握手[23]を交わして、ニズング王がヴェーレントの証人に、二人の騎士がアミリアスの証人になる契約をする。

アミリアスはその日のうちに弟子全員をひき連れて鍛冶場に行き、仕事にとりかかる。そして十二か月の間、仕事を進める。だがヴェーレントは毎日王の食卓に侍り、まるで例の件は聞いたこともないかの如くである。こうして半年が過ぎ去る。

ある日のこと王はヴェーレントに、どのように賭に勝つつもりか、いつ鍛冶仕事にとりかかるのか、と尋ねる。ヴェーレントは答えた。「それは殿様のお気持しだいでございます。ひとつ私が仕事をするための鍛冶小屋をお建てくださいますように。」この希望は聞き入れられた。鍛冶小屋が出来あがると、ヴェーレントは鍛冶用の諸道具と財宝を隠しておいたところに出かけて行く。

訳注

(23) handsal　法律用語。売買契約 sal 成立の合図として手 hond を握ることで、現在でも行なわれる（日本語の「手を打つ」に似る）。そもそもこれが挨拶としての握手の起源である。ラテン語 mandare「譲渡する」や mancipium「入手、財産」も同様に manus「手」を核として成立した法律用語。

《ヴェーレントの道具がなくなっている話》

99　ところがかの木の幹は破られて、道具も財宝もひとつのこらずなくなっている。まことに不愉快なことと彼は思う。だが彼は道具を隠した時、ひとりの男が見ていたことを思い出し、この男が盗んだことを確信する。しかし彼はこの男の名を知らない。そこでヴェーレントは王のところへ行き、一部始終をつげる。王も腹を立てて、ヴェーレントがその男を見つけられるかどうか尋ねる。彼はこう言う。「殿様、その男を見つけることはできますが、名前までは存じません。」そこで王は民会[24]を開くこととし、この国に住み、王の言葉に従う男子はひとりのこらず集まるように命じる。この指令はユトランドじゅうのあらゆる男子の家に達する。なんのために民会が招集されるのかだれにもわからず、皆がいぶかしく思う。

さて民会が開かれた。ヴェーレントは民会に集まった男子ひとりひとりの前に行き、彼の鍛冶道具と黄金と宝石を盗んだ男を見つけようとする。ヴェーレントはその男も、似た男すら、見つけられない。そして王にそう話す。

訳注

(24) Ping　ゲルマン人、あるいは古スカンディナヴィア人がもった立法・司法（時に行政）に関する集会。武装した全自由農民の直接的集会で、ギリシャ・ローマの平民集会（国政をとる貴族に対立する権能をもつ）とは内容が異なるため、「民会」という訳語は適切とは言いかねるが、すでに定着しているためここでも民会とした。「物・事」を意味する英 thing, 独 Ding はこの民会で定められる「法律的事項」が原意である。

《ヴェーレントが、道具を盗んだ男を見つけられないこと》

100　すると王は立腹してこうヴェーレントに言った。「お前はわしが思っていたよりずっと馬鹿な奴だ。お前の足に重い足枷をはめてやるにあたいするぞ。わしの面子をよくもつぶしてくれたな。お前のためにわしはこの民会を招集したのだぞ。国中から男はひとりのこらず馳せ参じたのだから、お前の道具と財宝を奪った男も来ているはずだ。ところがお前はそいつが見つからんという。なんたる阿呆だ。」こう言って王が民会の場を立ちさると、そこにいた全員もいなくなってしまう。黄金と道具を失った上に今や王の怒りまで買ってしまい、ヴェーレントは散々な思いである。

そのしばらく後にヴェーレントはひとつの品物を作る。それはある男にそっくりの人形で、頭には髪の毛もある。ある晩、ヴェーレントは王宮の広間に行き、その人形を王が用達しに行くのに通る片すみに置く。それから広間に行って、他の小姓にまじって立ち働く。

《ヴェーレントが作った人形の話》

101　さて王は家来どもと共に席を立ち、ヴェーレントもろうそくをもってお供をする。王はふと右手の方を見て、あの人形に向ってこう言った。「やや、わが友レギンよ、よくもどったな。なにゆえたったひとりでここに居るのだ。いつもどり、そしてわしがそのためにその方をスヴィーショーズ[23]につかわした例の件はどうなったのだ？」するとヴェーレントが言った。「殿様、この者は高慢者で、殿様にもお答えは差しあげぬでございましょう。この人形は私が記憶をたどって作ったもので、私の鍛冶道具と

黄金を盗んだ者の名は、このとおりでございます。」すると王は言った。「ここでお前がこの男を見つけられるはずもなかったわい。急ぎの用事があって、わしはこの者をスヴィーショーズにつかわしたのだからな。いや実にお前は腕のいい、頭のいい、しかも心正しき奴であるな。この男が盗ったのならば、道具も財宝もすぐに取りもどしてやる。また、わしがお前にむごいことを言ったのにも、つぐないをしてとらせよう。」

訳注

(25) Svipiöd　スウェーデン。『エッダ』の「ヴェルンドの歌」ではニーズズ王（『サガ』のニズング王）はスウェーデンの王ということになっている。

《こうしてヴェーレントが道具を取りもどすこと》

102　するとレギンが帰国し、王は彼に使いを出す。彼が現われると王は、ヴェーレントの道具と財宝を盗んだかと尋ねる。彼は白状し、冗談でやったのだと言った。そしてヴェーレントは自分の道具と財宝を取りもどし、またもや王の小姓として毎日仕える。こうして四か月が過ぎる。この期間が過ぎた時、王はヴェーレントに、あの賭のとおりに剣を鍛えるつもりはないのか、と尋ねる。彼はこう答える。「そうした方がいいとお考えで、そうお勧めになるのなら、すぐに鍛えます。」「わしが思うには」と王は言う。「お前の立場は楽ではないぞ。お前の相手は腕もあり、またなかなか腹黒くもあるからな。さあ、行って鍛えるがいい、お前の力を試してみよ。」

《ヴェーレントが仕事にかかり、一振りの剣を打つこと》

103　さてヴェーレントは鍛冶場に行って仕事を始め、……日後に(26)一振りの剣を打ちあげる。七日目に王が自らやってきた。ヴェーレントはもう剣をすっかり作り終えていて、かほど立派でかほど鋭利な剣は見たことがない、と王は考えた。それからヴェーレントは王とともにある小川に行く。ヴェーレントは厚さが一フィートの羊毛のかたまりを持っていき、それを小川に投げ入れ、流れるにまかせる。それから剣を刃が川上に向くように川の中に立てて、羊毛が剣に当たるようにする。刃は羊毛をまっぷたつに断つ。(27) すると王は、これは良い刀だ、自分の佩刀にしたい、と言った。するとヴェーレントは言った。「これはたいして良い剣ではありません。もっとはるかに良い剣を作るまで、仕事を続けます。」王は自分の広間にもどり、上機嫌である。

訳注

(26) Mb本はこの箇所が不明。この下の「七日目」は紙写本AとBでは「四日目」である。

(27) 川に羊毛の束を流して水中に立てた剣の利鈍を試す方法は、すでにスィグルズ伝説に現われている。『エッダ』の「レギンの歌」十四節、その散文化である『ヴォルスングのサガ』十五章参照。刀剣の鋭利さは岩石や鋼鉄を切断して証明する方が一般的だが、多少時代が下ると、このような手のこんだ、あるいは繊細な技巧を用いるようになるのは洋の東西を問わぬらしい。日本でも天下太平の江戸期には、正宗が川上からわらしべを流して村正の作刀の利鈍を試みた、という話が流布していた。

《ヴェーレントがその剣を砕いて第二の剣を作ること》

104　ヴェーレントは鍛冶小屋にもどり、やすりを取ってその剣をすっかり鉄の粉にしてしまう。それから小麦粉とそれをかきまぜる。それから飼い鶏を連れてきて三日の間絶食させる。そしてあの粉をエサとして鶏に与える。その鶏の糞を取り集めて火床に入れ、熱してすべての不純物を鉄の中から沸かし出す。それから彼は一振りの剣を鍛える。(27) これは前の剣よりも小さい。剣ができあがると王がヴェーレントのところにやってくる。そしてその剣を見るやいなや、自分の佩刀にするために持っていこうとする。「これよりも良い宝は」と王は言う。「手に入れることもできなければ、見つけることもできぬわ。」

訳注

(28) この奇妙な鍛刀法は長いこと、秘儀に傾いた錬金術の影響を受けたものと考えられてきた。動物の体内を通すことによって鉄に生命力を与える、というわけである。ところが一九三〇年代にドイツの冶金学者が学問的に注目し、動物の糞や牛の脂や血のような有機物を粉状の練鉄に混ぜて鍛練するのは、滲炭窒化法という鋼鉄製作の原則にかなった方法であることを実証した。しかもこの方法をくりかえすことによってきわめて堅い浸炭鋼が柔軟な鋼鉄と緻密に混じり合い、極上の切れ味でなおかつもろくない刃物ができる。実際にバグダットの刀鍛治は類似の方法をとっていたという報告もある。一九三六年にはこの方法に基づいた特許申請が二件出されたそうである。(A. Luck, Aller Schmiede Meister Wieland der Schmied, Siegen 1970, S. 42f ; H. Ritter-Schaumburg, Die Nibelungen zogen nordwärts, München-Berlin 1981³, S. 44 f.)

《ヴェーレントが第三の剣を作ること》

105　するとヴェーレントは言った。「殿様、これは良い刀ですが、しかしもっと良くならなければなりません。」二人はあの小川に行く。ヴェーレントは二フィートの厚さの羊毛のかたまりを剣の前に投げる。剣は前回と同じように羊毛をまっぷたつに斬る。そして王は言う、「どんなに遠くまで探し求めても、こんなに良くできた剣は手に入れられぬ」と。ヴェーレントは、この倍も良いものをこしらえましょう。と言う、この言葉は王の気に入る。彼は広間にもどって上機嫌である。ヴェーレントは鍛冶小屋に行き、やすりで剣をすっかり粉にし、前回やったのとまったく同じ方法をとる。三週間たった時、ピカピカ輝き、金象眼され、見事な柄のついた剣を彼は作りあげている。

《剣ができあがり、王がそれを見ること》

106　さて王がやって来てこの剣を見て、これよりも見事で鋭利な剣は見たことがないと思う。しかもこの剣は手ごろの大きさであるが、以前彼が作ったものは、普通の規準よりずっと長大であった。両人はあの小川に行く。ヴェーレントは三フィートの厚さで長さも同じ羊毛のかたまりをかかえ、それを小川に投げる。それから剣を静かに水中に立てる。羊毛が剣の刃に当たると、刃は羊毛を水の流れとまったく等しく音もなく両断する。するとニズング王はこう言った。「世界じゅうのどこを探しても、これほどの剣は見つかるまい。これから敵とたたかう時はいつでも、必ずこの剣を帯びてまいるぞ。」

《ヴェーレントが剣をミムングと名ずけること》

107　ヴェーレントは答えた。「この剣が多少なりともお役に立つのでしたら、殿様以外のどなたにも使っていただくものではありません。しかしまず剣帯と鞘とをこしらえまして、それから献上いたします。」王もそれで満足し、広間に帰って上機嫌である。ヴェーレントは鍛冶小屋にもどり、仕事を始めてもう一本の剣を作る。それは以前の剣にたいそう似ていて、だれも二つを区別できない。ヴェーレントは良い方の剣をふいごの下に押しこんで、こう言った。「ミムング[29]よ、そこに居るのだぞ。遠からぬ先に俺がお前を必要とすることになりはしないか、だれにもわからないのだから。」

訳注

(29) Mimungr　なぜこの名がつけられたか不明である。古英語詩 Waldere（八世紀）にすでにこの剣は Welandes worc として歌われ、中高独語の英雄ロマンスには、ヴィーラントが鍛え、息子のウィテゲ Witege（ノルド語 Viðga）が所有

した名剣 Mimine として頻出する。シーズレク大王伝説の周辺にしかこの名は現われない。ヴェーレントが最初に弟子となった名人鍛冶 Mimir と関連があるものと考えたいが――たとえば上述の鶏を使う「滲炭窒化法」は本来 Mimir の秘伝であったとか――、しかしこの剣の名の第一母音は常に（ノルウェー、英、独、スウェーデン語のどれにおいても）短母音であり、Mimir（中高独語 Mime）とは結びつきそうにない。

《ヴェーレントが王に仕えること》

108　ヴェーレントは鍛冶仕事をすべて終え、また約束の日まで毎日王の食卓に仕える。さてその日がやってきた。もう朝早くにアメリアスはすね当てを身につけ、市場に出かけて大いに誇示する。皆が口々に、こんなに良くできた具足は見たことがない、と言った。すべてが二重鍛えで、抜群の出来ばえだった。朝食の時間になると、彼は鎖かたびらを着こむ。それはたてにも横にも長大なもので、やはり二重鍛えである。こうして彼が王の食卓に近ずくと、だれもが、この鎖かたびらほどの武具を見た者はいないだろう、と思う。アメリアスは上機嫌で、この武具のことが自慢でならない。王の食卓の前に来ると、アメリアスは兜をかぶる。兜はピカピカに輝き、おそろしく頑丈でぶ厚い。王はこの甲冑がとても気に入る。さて王は満腹し、食卓も片づけられた。するとアメリアスは外の庭に出る。そこには一脚の椅子があり、彼はそれに腰をおろす。さて王も家来の一同を引きしたがえてそこに来る。ヴェーレントも一緒である。するとアメリアスは、賭を試す準備は自分の方は完了である、と宣言する。

《ヴェーレントが鍛冶師アメリアスとの賭に勝つこと》

109　ヴェーレントは自分の鍛冶場に行き、ミムングと名づけた剣を取って王のもとにもどる。剣は抜身のままである。それから彼はアメリアスが座っている椅子の後に行って、剣の刃を兜の上にのせ、アメリアスと話しはじめる。彼はアメリアスが何かを感じるかどうか尋ねる。するとアメリアスはこう答えた。「渾身の力をふるって切りつけるがよかろう。必要と思うことはなんでもやってみるものだぞ。それが役に立てばの話だが。」さてヴェーレントはかの剣を強く押しつけて引くと、[80] 兜も頭も鎖かたびらも胴体も帯のところまでまっぷたつになった。そしてアメリアスの人生はこれで終る。今や多くの人々がこう言うのだった。「自慢の鼻を高くしすぎると、一番下まで落ちるものだ」と。さて王はヴェーレントに剣を差し出すように命じ、手ずから奪いとらんばかりである。

訳注

(30) 紙写本AとBではここに以下のような面白い会話が入っている。

「ヴェーレントは尋ねた、何かを感じるかどうかと。アメリアスは答える。水がスウーと自分の身体を流れたような気がすると。するとヴェーレントは強く剣を引き、身体をゆすぶってみるようにと言った。伝えられるところでは、アメリアスがそれをすると剣はベルトのところまですべり落ち、彼は身ふたつになって椅子から落ちる。」

まるで落語か講談を聞くようである。前注27で見た羊毛試しと同類の、刀剣の切れ味の証明としては技巧の多い、比較的後期のやり方であろう。AB両写本の時代がうかがえる箇所である。

≪ヴェーレントがミムングそっくりの剣をこしらえること≫

110 するとヴェーレントは答えた。「殿様、私はまず鍛冶小屋に置いてある鞘を取って来なければなりません。こしらえ一式をそろえて献上いたしたいのです。」王はこれをよしとする。そこでヴェーレントは鍛冶小屋に行って、ミムングをふいごの下に隠す。そしてもう一振りの剣を取り出して鞘に収め、それをもって王のもとにもどる。王はそれがヴェーレントの名を高めた例の剣であると信じる。そして、今や世界中どんな果てまで行こうと、これより良いものは見つけられない名剣を自分は所有しているのだと信じ込む。こうしてしばらくの時が過ぎる。

≪ヴェーレントが北の国々ではヴォロンドと呼ばれること[31]≫

111 さてニズング王は領国を支配し、北国人[32]がヴォロンドと呼ぶ名高い鍛冶師ヴェーレントはこの王のもとに仕えている。彼

は王のために金や銀その他の鍛造できるかぎりの金属から、ありとあらゆる種類の宝物を作り出す。ヴェーレントの名前は全世界の北半分[33]においてたいそう名高く、だからだれでもが抜群に見事な鍛冶製品を見ると、「これを作った者は技においてヴォルンドだ」と言うくらい、[34]彼の技量を最高に賞讃するのである。

さてヴェーレントはニズング王のもとで丁重に、名誉をもって待偶される。彼はすべての男の中で最も技にたけ、最も名高い者なのだ。

訳注

(31) 『サガ』の作者はこの章で、自分が今ここで語っている北ドイツ系のヴィーラント物語とは別の、スカンディナヴィア系のヴィーラント説話を知っていることを明瞭に語っている。『エッダ』の「ヴェルンドの歌」が現存する唯一のスカンディナヴィア系文献資料であるが、他にどのようなものがあったのか、知るよしもない。しかしニズング（ニズズ）王に対する復讐譚が中心であることはまちがいない。この章以下が『サガ』における復讐譚なのだが、その冒頭部にあたって『サガ』作者が北欧圏のヴィーラント像にわざわざ言及しているのは、どのような効果をねらったものだろうか。聴衆に、「さあこれからはみなさんおなじみのヴィーラントの（復讐）物語、東西トーザイ……」というような「本番の出し物」を印象づける前口上を述べているのではないだろうか。これまでの筋が北欧の聴衆にはやや縁遠い北ドイツ種子であったことが、この箇所からもうかがえるだろう。

(32) Væringiar　『シーズレクのサガ』ではバルト海周辺の北方ゲルマン人の総称。一般にはコンスタンティノープル皇帝の親衛隊のことを言う（当初はほとんどスカンディナヴィア人から採用したため）。元来は東方に進出したスウェーデン系ヴァイキングの自称らしく、この『サガ』作者がバルト海貿易の世界と近い関係にあったことを物語るか？

(33) Norðrhálfa　ほぼヨーロッパのことを示す。Suðrhálfa「アフリカ」、Austrhálfa「アジア」。

(34) 「名匠」という普通名詞に Vǫlundr という名が使われる例はこの他にも多い。Vǫlundr rómu「戦さの名匠＝オージン Óðin」。現代アイスランド語でもまだ Hann er mesti Vǫlundr「彼は最高の名人だ」と言う。

（四）これまでの章について、名人鍛冶ヴィーラント伝説の考察に役立ちそうな諸特徴を（部分的には訳注部と

重復するが）簡単にまとめておく。

［A］「ヴェルンドの歌」をはじめとする他の資料には一切ヴィーラントとの関連が出ていない巨人ヴァージが、ヴィーラントの父として登場すること。父親（ヴィルキヌス王）のような英雄的世界を嫌い、日常的平和を好んで、遺産として与えられた農場を守っているこの巨人は、父よりも人魚である母親の血を濃く引いているものと思われる。息子をも鍛冶屋に育てあげようとしたこの「小市民的」巨人は、普通はヴィーラント伝説とは元来無関係のメルヒェン的登場人物と見なされる（訳注(1)参照）。だが中高独語の英雄ロマンス Rabenschlacht（十三世紀）で、ヴィーラントの子供とされる Wittich は苦境を人魚に救われる。彼の「曽祖母」が人魚であったことがこの筋書に関係していないだろうか。

そもそもヴィーラント伝説には、どこかしら「水辺」や「水鳥」の匂いがつきまとう。「ヴェルンドの歌」の冒頭は、池で水浴する白鳥乙女をヴェルンド兄弟が妻とするいわゆる「羽衣伝説」ではじまる。中高独語の韻文ロマンス Friedrich von Schwaben では、突然ヴィーラントという名で呼ばれるようになる主人公フリードリヒが、泉で水浴する三羽の白鳩乙女の羽衣を奪って妻とすることにより、ハッピーエンドになる。白鳥または水鳥が鍛冶神のシンボルと見なされていた時期があるのではないか、という推測を私はかつて日本の類似例をあげながら下したことがあったが（「ヤマトタケルと白鳥とヴェルンドの歌」『匙』十号、一九八六年）、それはともかくヴィーラントの原像に「水辺」の匂いがするとすれば、人魚の息子で海を渡渉してしまう巨人ヴァージは、案外古くからヴィーラントと関係づけられていたのではないだろうか。（ヴァージと聖クリストフォロスの類似については訳注(11)を参照）。

［B］
訳注(5)と(8)で触れたように、『シーズレクのサガ』においてはじめて、ヴィーラント伝説の北ドイツ、殊に古来鉱業が栄えたヴェストファーレン地方との密接な関係が明らかになる。すでに十二世紀の文献に「ヴィーラントがジーゲンでこしらえた酒杯」とあるが（訳注(5)）、ヴィーラントが鍛冶修行をこの地方で行ったという記述は、このサガをおいては見出せない。「ヴェルンドの歌」では「ラインの谷」という表現などにわずかな痕跡が見られるのみである。

ただしこれは、現在知られているようなヴィーラント伝説の形成・伝播には北ドイツの鉱山地帯の伝承が相当大きな役を演じたであろうという推測をうらづけるものではあるが、ヴィーラント伝説の起源については必ずしも多くを語らない。（私は現在のところギリシャ神話との類似から考えて、この伝説の発生地は小アジア方面、それが北ドイツで土地の鍛冶伝承と結びつき、いわば「増幅」されて広まったものという考えに傾いている。）

［C］
名人鍛冶ヴィーラントの名声は、その名が「名匠」という普通名詞になるほど（訳注(34)参照）北ヨーロッパに広まっていたが、具体的に何をどのように鍛えたかを詳しく教えてくれるのは、この『シーズレクのサガ』のみである。粉末状の鉄を鶏に食わせてその糞から刀を鍛つという一見突拍子もないように思えるこの鍛刀法が、実は理にかなったものと証明されたことについては訳注(28)参照。

［D］
一一一章でサガの作者が明瞭に、北欧ではヴィーラントが「ヴォロンド」として既によく知られている存在であることを証言している。それが具体的に「ヴェルンドの歌」を指しているかどうかは解明できないが、大陸系（北独系）と北欧系という二種のヴィーラント伝説が併存していたことを知る貴重な証言である。

《以下次号》